

### — 秋田の「秋」にはなぜ「火」がつくのか？～お米と呪いの深い関係 —

県内の小学校を訪れると、遠く続く田んぼの向こうに奥羽山脈が連なったり、教室の窓いっぱいには鳥海山の雄大な姿が見えたり、阿仁の鬱蒼とした森とせせらぎの間に校舎があったり、豊かな自然に囲まれた学校が多い。対して、附属小学校は住宅に囲まれた街中の学校である。自然は限られるが、秋田大学広報誌アプリーレ「附属小学校 150 周年特集号」によれば、2年教室前の敷地を学校ビオトープ「はとの子の森（仮称）」として整備する計画がある。この一角の約5m四方の田んぼが、本単元「おいしいお米つくりたい part3～きらきら収穫祭を開こう」の舞台だ。小さな田んぼでの米づくりは、子どもたちにどんな思いやねがいをもたらすのか。

9月下旬の初回から10月初旬の本時にかけて、稲穂は日に日に高く大きくなる。ただ、収穫量は年ごとに全く違うので安心できない。学年全員分おにぎりを作っても余るくらいの年があれば、稲穂の中身が空っぽでわずかししか採れない年もある。それだけに、穂が実り始めると子どもたちはいっそう田んぼに真剣になる。グラウンドからボールが飛び込まないように教頭先生にお願いしてネットを張ってもらったり、注意を呼びかけるポスターを作って上級生の教室に貼ってもらいに行ったり、スズメ除けにへびやワシの案山子を立てたり。自立的に田んぼのお世話をすることが、収穫祭への期待も高める。準備では創作の自由を最大限に担保する方針で、子どもたちから多彩な企画が溢れた。お米妖精に扮し「お～こめ、お～こめ、ありがとう」と、自作した曲と振り付けで踊る。竿燈にへびを巻きつけたり、稲穂を貼り付けた段ボールを身体に巻いて巨大米俵を作ったり、お米博物館や非公式キャラクター「おしゃライスちゃん」など創作は多岐にわたる。段ボール製のお化け屋敷（その名も「こ迷路」）には、お米を粗末にすると罰が当たる意味で「呪米（のろいまい）」と書いてある。本単元の目標は「育ててきた米の収穫を祝う祭りを創る活動を通して、友達と遊ぶよさを実感しながら、生命の尊さや人との関わりについて考え、表現する」である。小さな田んぼから始まり、子どもたちは収穫祭への喜びと期待を自由に表現しながら、そこには共通するお米への思いもあるように見えた。

ところで収穫の秋、秋田の「秋」の字はなぜ「のぎへん」に「火」と書くのだろうか。穀物に火を点けたらまずいと思うのだが…。古代漢字研究の大家、白川静によれば、二千年前の秋の字には「龜」の字が入っていた。これは動物のカメではなく昆虫のバッタを表す。バッタ被害すなわち蝗害（こうがい）は、古代中国では洪水や干ばつと並ぶ恐るべき災害だった。白川文字学曰く、秋の字には収穫の季節に害虫を燃やして無事と豊作を祈る宗教的、呪術的な由来がある。その意味で「呪米」と書いた子の真意は「のろい」ではなく「まじない」であり、豊作への願いを表現したのだろう。子どもたちが創作した収穫祭には、随所にお米の神聖さや尊さが表現されていた。竿燈に巻きつけたへびは田んぼを守った案山子そのものだ。スズメ除けの金色の鈴を「聖なる物」と言って剣先に吊るしてみんなで押んだり、お米妖精がイヤリングにして身に着けたりした。思い思いに創作したようで、実は目の前の田んぼと深くつながり、収穫するお米への感謝と敬意に満ちていた。本時になると急遽企画した「お米オリンピック」が始まり、田んぼの周りをリレーして走り、田んぼの中では雑草ぬきゲームを楽しんだ。その姿は、祭りの創作の果てに再び子どもたちが自分たちの田んぼへと原点回帰したようだった。

秋田城跡の出土品は、この地が千年以上も前から秋田と呼ばれていたことを物語る。附小の子もまた秋田の子であり、お米への思いを脈々と受け継いでいる、そう実感できる単元だった。